「天使の恋」　美雪編の１話～７人の天使の物語

　京都の繁華街の中心、四条河原町の近くの丸高デパートの従業員出入り口で美雪は正也の出てくるのを待った。美雪は高校を卒業してこのデパートに就職して二年目の春で二十歳、中肉中背で肌はテニスが趣味で小麦色に焼けてはいるが元々そう白くはない。目元がキリッとしているがエレベータガールのような華やかさはないが決して不美人でもなかった。
　笑うと高校生の匂いがまだ残っている美雪と正也の仲はデパートでは知らない人がいないほどオープンに付き合い同僚の女の子も多少の妬みもあるもののこの二人を暖かく見守っていた。
　正也は京都大学法学部出身の２８歳で丸高デパートのエリートコースの人事部配属されこの春、同期トップで課長補佐に抜擢されていた。比叡山高校時代は陸上部のキャップテン、京大ではテニス部に高山正也ありとまで言われたスポーツマンで、その上背が高くて超ハンサム。どちらかと言うとこのカップルは少々不似合いと噂するデパート雀の声もあるがこの二人に聞こえてこなかった。
　正也が通用門から出てくるのを確認すると美雪は向かいの路地に隠れ後ろから「ワッ！」と驚かしてはいるが、これも毎度のことで正也は驚いてはくれない。美雪は背の高い正也にぶら下がるように手を組み四条通りを東へ祇園のスナックへと歩いた。
　この見栄えのする青年を美雪は入社の面接で一目惚れをしていた。入社してからも食堂や廊下ですれ違っても口が聞けないほど緊張していた、これは他のデパートガールも同じで特に結婚適齢期の２３歳から上の子は目の色を変えていた。丸高デパートでは、お茶やいけばな、そしてスポーツクラブがあり、会社も人数に応じて補助金を出していた。美雪は正也がテニス部のコーチだと知るとその日の内に入部していた。
　それから一年、他の企業との試合の帰り支度をしていると正也が、
「内田君（美雪の苗字）の家はどっち方向？」
「はい、桂西口です」と答えると正也は、美雪のスポーツバックを持って一人で前を歩きだした。
　テニスの試合といっても美雪はボール拾いで、部の練習でもまだ一度も相手にしてもらえなかった。それが今日は正也のスポーツカーで送ってくれるというのだから美雪はハイテンションを通り越してうつむいて「はい」としか言えなかった。
「内田君、ファミレスでも付き合わない」
「はい…」
「軽く一杯飲んでいく？」
「はい…」
「少し酔ったから散歩する？」
「はい…」
「悪いけど、腕を組んでくれる？」
「はい…」
「これからも付き合ってくれる？」
「はい…」

「ラブホは初めて？」
「はい…」
「少し休んでいこうか？」
「はい…」
　こうしてあれよあれよという間に美雪は正也に処女を与えていた。美雪は心も身体も完全処女で女性にはもてるが処女には縁がなかった正也を感動させていた。

　「美雪、今日はどこへ行こうか？」
正也は明日から東京本店に長期主張する。この秋に丸高デパート新宿店オープンのための社員、パート募集の準備のために全国から有能な人事部員社員が集められ一ヶ月の予定だった。美雪は今夜は正也と静かに話がしたい、カラオケなどない店が良いと少し高いが京都ホテルのラウンジをねだった。
　四条河原町の近く、丸高デパートの前に素敵なラブホテルがあり、最近の二人はここを良く利用している。正也のセックスは美雪の身体を丁寧に愛撫することからはじまる。美雪も正也とのセックスが好きで真剣に感じることに努力しているが山登りで言えば七合目か八合目でいつも終わる気がしていた。さりとて美雪はまだその頂上には登ったことがないが、なんとなく不満であったがそれはまだ年も若いし経験も少ない、正也と結婚すれば経験できるであろうと内心楽しみにしていた。
　ホテルから少し歩くとタクシー乗場がある。正也は滋賀県の大津、美雪は桂と正反対のためにこのタクシー乗場で軽いキスをしていつも別れている。美雪は一週間の仕事の疲れとセックスの疲れと酒の酔いがドット出てきた。
　美雪はタクシーの運転手に「桂西口を南、線路沿いに出て、ローソンの前」と告げて静かに目を閉じたのもつかのまで運転手に起こされて料金２５００円を支払おうとバックの中の財布を探したが、酔いと寝起きで頭が回らない、
「運転手さん、スイマセン、上に上がってお金を取ってきます、４階の一番左端です」と言ってフラフラしながらマンションの中に消えた。
　運転手はローソンの上のマンションを見上げて４階の左端の部屋に電気が点くのを確認したが、１５分待っても降りてこなかった。運転手はタクシーのエンジンを切り、４階までエレベーターで上がりその部屋を軽くノックするが返事はない。ノブを回すとドアが開いた、１ＤＫの部屋で部屋に入ればすぐにベッドがある。そのベッドに女は仰向けに寝ていた。
　ベテランドライバーのこの男は過去にもこのような経験をもってはいるが、これは男は少なく女に多い、女であっても水商売のおばはんと相場がきまっていた。ひどい話になるとタクシー代を踏み倒して欲求不満を解消させる作戦をする女もいる。もっとひどいのになるとあくる日には高級外車がタクシー会社に横付けされて「俺の女房が世話になって」という美人局の脅迫もあるから運転手も用心しなければならない。
　しかし、今日は２０歳そこそこで可愛い顔をしてスヤスヤ寝ている。運転手はタクシーのキーにつけていたキーホルダー型の豆ライトを口にくわえ、部屋の照明のスイッチを切った。

運転手はスカートのファスナーを下げスカートを腹の上にまくりあげ、パンティストッキングを丁寧に脱がしていく、ピンクのパンテイーも尻の下に両方から手を入れ足首までずり下げた。左足と右足を９０度に広げ、足首を掴み尻の方に押すと立てひだになった。
豆ライトに照らされたビーナスの丘は異常に高く感じられ、そこにパンティーの圧力から解放された陰毛が喜んだのか微妙に動いている。その下には半開きの縦に割れた唇があったが、肝心の下の部分は柔らかい蒲団に沈んで見えにくい、運転手は傍にあった丸いクッションを足で引き寄せ、女の背中と腰の窪みにクッションの先を入れ左手で引っ張った。それを両手で尻の下までジワリジワリと引っ張ると女の縦に開いて唇が少しずつ上上がって運転手の目の前でとまった。
半開きのこの唇をを両方の親指と人差し指で左右に静かに開くと中は淡いピンクで下ほどにはペニスの出入り口の穴が小さく開いている。その少し上には爪楊枝で穴を開けたほどのオシッコの穴がある。そのまた上には丁寧に皮で包装された小粒の真珠が先だけだしてピカッ！と光っていた。その真珠の頭を人差し指の腹で下から上に押し上げるように滑らすと運転手の目の横にある太股の内側がピクッ！ビクッ！と動いた。

運転手のクリトリスへの悪戯が脳を刺激したのか美雪は正也とのセックスの夢を見ていた。正也のゆるやかな腰の動きに合わして快感が五合目から六合目に上がってきた、さらに七合目から八合目に差しかかるころ正也の腰の動きが急に早くなり射精の準備に入った。美雪は正也の腰に手を回して「まだ、イカないで！私はもう少し正也！ガマンして！」と祈りながら腰の最後の動きを必死に止めようとしていた。
運転手は豆ライトでじっくり観察していると唇の下には薄白い液体が流れ出ようとしている、そして運転手は二本の指をそろえて手の甲を上にして静かに奥まで入れた。美雪の口からは「アッァァッ」、少し引いて強く入れると「アッアッアッ！」、それを二回繰り返すと「アッイッアッイッア～～～」。そして指を静止すると指をキュッ！と閉めて動けと催促している。
運転手は仕方なくリズムを取りながら二本の指を出し入れすると「アッアッイッイッ！」「あっあっいっいっ！」とそれに応えている。二本の指を手前に引くと愛液がどっとついて出てくるがそれでも次から次から湧いてくる。
女の手は何かを掴もうとしているシーツを掴んでは離し、やっとベッドの堅い部分にたどりついて安心しているようだ。このころから美雪のよがり声は「クックックッ！」に変わっている。運転手はそろそろフニッシュと感じたのか、とどめの指ピストンを連発すると美雪は指を入れたまま尻をクイクイと二回しゃくれさしてから全身の力を抜いて静かな眠りに入った。
運転手はあわてず静かにやさしくクッションを女の尻から取り、パンティーとパンティーストッキングを履かせ、スカートを元通りにしてからドアをロックして出て行った。その直後、美雪は喉の渇きで目を覚まし冷蔵庫のウーロン茶を飲んだ。そして下腹部の違和感に気がついたが、それは正也とのセックスのせいと思いながら下着を着替えて男物のダブダブのパジャマを着て深い眠りに入った。

１ヶ月たった頃、丸高デバートの事務用品売り場の社内電話が鳴り美雪がでた。正也の声で今日急に帰ることになった、９時ごろには京都駅に着くから祇園の「スナック・愛」で待つよう

に言った。正也の予定は木曜日になっていたが、デパートが水曜日休みで今日火曜日の夜は遅くまで遊べるからと正也が気を使ってくれたと思い美雪は売り場の客まで聞こえるほどの声で喜んでいた。

美雪は急の電話に喜んだが、考えて見ると着替えの下着などの用意はしていない。今履いているパンテイーは３枚千円のバーゲンの安物で、もう何回も洗濯をしてヨレヨレになっていた。そこで美雪は休憩時間に京都に本社があるランジェリーメーカー「フラワー」のコーナーで少し派手だが正也を喜ばそうと大人のセクシーな下着を上下買い、それをバックに入れて四条花見小路まで歩いて行くと前のタクシーから正也が降りようとしているのを発見、そ～と近づき「ワッ！」とやったら正也は今日は本当に驚いていた。

美雪と正也は仲良く手をつないで「スナック・愛」に向かった。そして２時間ほどで店を出て、四条通りを西に歩きいつものラブホテルに入った。

つづく

★この正也を喜ばそうと思って買ったセクシー下着が…二人の別れになった。次回をお楽しみに！

★～長編小説「京都フラワーランジェリー物語」もぜひ読んでください。

パブーの小説は、http://p.booklog.jp/book/16636